

編集後記

前號の編集後記でもいわれたことであるが、第 13 回日本醫學會總會が東京で開かれる。41 分科會を持つ盛會で、既に萬餘の會員の申込があり、この雑誌が発行される頃には空前絶後の總會になるものと見られている。

この第 13 回總會には病院管理學會はまだ参加していない。分科會として参加するような母胎がないからである。しかしながら次の名古屋に豫定されている學會には、是非とも病院管理學會が成立して、總會の一翼をになうようにありたい。そのような意味で、本號には特に巻頭にエディトリアルを設け、そのことを主張した。

現在の状態では東京をはじめ各地に病院協會が設立され、運営を開始しているが、まだその動きは活潑なところまでゆかず、會員の心を完全に把握するところまでいつていないようである。病院協會のあり方、及びその運営の方向自體についても再検討する餘地が多いと思う。全國病院協會の結成への胎動はあつても、まだまだ途は遠い感がある。いわんやインターナショナルなつながりにおいておやである。

雑誌「病院」が生まれてから 51 年有餘、その歩みは遅々たるものではあつたが、大きな歴史の流れの中から見ると、この 1 年餘はかなりめざましい、飛躍であつたともいえる。1 年前と現在では病院管理についての關心は天地の相違がある。病院管理とは何かということも、末端までしんとし自覺されてきた。既に總論の段階を終つて各論の域に入つたこともその證據である。「病院管理研修所」の仕事も重要な歩みを續け、雑誌「病院」への投稿も増加した。2、3 號で原稿がなくなるのではないかなどと冗談をいながら編集されていた頃とはまさに隔世の感が深い。

本號に日赤中央病院長東博士から渡米の體驗にもとづき、血液銀行について執筆していただいた。「病院」ではこの問題を初めてとりあげるわけであるが、CIE 提供の寫眞資料も加えたから熟讀されたい。日赤は今後血液供給の中央機關として使命を果すことになつたのでその使命は大きい。

ついでであるが血液銀行と血液金庫の區別を提唱したい。中央機關として血液を供給するのは血液銀行であるが、各病院には bank から供給を受けて、それをたくわえておく金庫が必要である。これは血液金庫とも呼ぶべきものであろうか。

本號には重要な記事がその他に 2 つある。その 1 つはモデル設計の解説である。これはもつと早く果すべきであつたが、慎重に練られたのち、本號に發表する。實際設計に大きな役割を果した吉武助教の意見に、實地の經驗から守屋、吉田兩氏の批判と解説を加えた。是非研究していただきたいテーマである。

いま 1 つは、歸朝した守屋委員をかこみ、アメリカでの經驗を豊富に持つ橋本博士からも有益な意見を聞きながら座談的に話を進めた編集會議の記録を掲載してあるが、これは病院關係者必讀の文字であると信ずる。病院管理についての新しい問題、今後發展の方向はこの短い記事のなかに盛りあげられている。

このような企ては今後も續け、アット・ホームな雰囲気の中でビック・アップされ掘り下げられた新しい問題の所在を紹介してゆきたく思います。(編者)

診 断 第 一 主 義

さくら X レーフィルム

さくら X レーフィルムの高感度は撮影時間を短縮し従つて常に鮮鋭な写真を得られます。又患部を表現するその調子は医師の診断に決定的要素を與えます。

直接用 大四切、六切、八切、カビネ、齒科用
間接用—35mm 6×6判

小西六寫眞工業株式會社